

乳がんレセプト傷病名の妥当性研究

著者	佐藤 泉美
学位授与年月日	2013-04-24
URL	http://doi.org/10.15083/00006166

[課程-2]

審査の結果の要旨

氏名 佐藤 泉美

本研究では、レセプトデータから既存の乳がん診断症例を同定するため、乳がん傷病名の妥当性を評価し、さらに定義を探索的に設定し、それらの定義による乳がん診断症例同定の性能を評価することを目的としたものであり、下記の結果を得ている。

1. レセプトの乳がん傷病名（診断群分類の乳がん傷病名を含む）は、レセプトデータの記録とがん登録のタイムラグを考慮せず、乳がん疑いの記録を除いた場合に、感度、特異度、PPV がそれぞれ、98.7%、99.3%、65.8%だった。本研究では、偽陽性になった症例も、診断日が対象期間からずれていたために、本研究での Gold standard の乳がん診断症例と認められなかっただけで、実際は全て乳がん診断症例であった。レセプトの乳がん傷病名（診断群分類の乳がん傷病名を含む）は大規模レセプトデータを使用する際に、膨大なデータから効率良く乳がん診断症例を見つけるための優れたスクリーニングの定義になると考えられた。
2. 特異度はいずれの定義でも 97-99%と高かった。本研究では先行研究と同様に、検査に関連する医療情報よりも、治療に関連する医療情報を使用した定義で高い陽性的中度であった。また、陽性的中度と感度が共に高かった、乳がん傷病名（診断群分類の乳がん傷病名を含む）かつ複数医療情報（手術、化学療法、薬剤、放射線療法のいずれか）の組合せによる定義が、本研究では、レセプトデータから乳がん診断症例を同定するために適した定義であることが示唆された。

以上、レセプトの乳がん傷病名は、感度、特異度が高く、レセプトデータから乳がん診断症例を同定するための定義は、複数の医療情報（手術、化学療法、薬剤、放射線療法のいずれか）を組合せること、及び「疑い」記録の利用により、乳がん診断症例の同定の性能が向上することが示唆された。ただし、単独医療機関のデータから得られた示唆であるため一般化には限界があり、複数医療機関のデータでの検証が必要である。